



令和2年度

鹿児島県の教育

7月号

巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会特別支援学校長部長

福田 雅紀
県立鹿児島養護学校長

褒められたかった信長

先日、大河ドラマ「麒麟が来る」の中で、信長が光秀に対して「わしは幼い頃から誰からも褒められたことがない」と話す場面があった。信長は発達障害だったと言われているが、母親の土田御前の「お前はわたしの大事なものをすべて壊してしまう」という台詞なども含めて、脚本家はそのことを意識して書いたのではないかと思ひ非常に興味深かった。

昨今、学校において発達障害の子どもを「褒める」ということが随分浸透してきたように思う。発達障害のある子どもの場合、褒められることが少なく、逆に、叱られたり、うまくできなかつたりする経験が多いことから、心のコップの水が溢れやすくなり、ちょっとしたことで水が溢れやすくなる。その状態がパニックや不適応行動であるが、コップの水が溢れさえしなければ、そういう行動は起こさないですむ。では、どうすればコップの水を減らすことができるか、そのための最も有効な方法が「褒める」ことである。

以前、ある教員に「この子どもの一週間褒めてください」とお願いしたことがある。一週間たって、その教員が言った言葉が「何も褒めるような行動はなかった」ということであった。確かに、特別なことを見付けよ

うとすればなかなか難しい。しかし、わたしは「褒める」という行為の根本は「わたしはあなたのことを見ていますよ」というメッセージだと思っている。したがって、当たり前のことが当たり前にできたときに「できたんだね」と伝えてあげることから始めるとよいと思う。例えば「ちゃんと帽子をかぶっているね、えらいぞ」とか、「今日も元気に登校してきたね、嬉しいな」とかである。言葉を掛けられた子どもは、「先生は自分のことを見ていてくれる。もつとがんばろう」と思うであろう。そのがんばりを見逃さず、すかさず「頑張ったね、ちゃんと見てたよ」と伝えてあげれば、子どもは心のコップの水はどんどん下がり、自己コントロールが利くようになる。このことは発達障害のある子どもだけではなく、すべての子どもに通ずることだと思ふ。

冒頭の「麒麟が来る」の中で、光秀から「みんなが褒めましようぞ」と言われた際の信長の嬉しそうな顔を見ていると、もし、父親の織田信秀や土田御前が、若き日の信長を褒めて、認めてあげていれば、延暦寺の焼き討ちなど、非道な行動を繰り返す信長は存在しなかつたかもしれない。

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	3	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育	7	一般財団県校長会館だより	20
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		

令和2(2020)年7月号

一般財団法人鹿児島県校長会館
〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13
振替 02030-1-3192
TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有)アクト印刷
鹿児島市東坂元二丁目29-1
TEL 247-1605 FAX 247-2844



タツノオトシゴ親父に

なれたこと

タツノオトシゴハウス 代表 加藤 紳

タツノオトシゴは謎とかわいさに満ちた生き物です。まずあのひょうきんな姿。魚類なのに立って泳ぎます。その風貌を間近で見ると、まさにその名のごとくまるで本当に竜の子どものよう。さらにはメスから預かった卵をオスが育児嚢と呼ばれる袋で育て出産するわけですから、誰もがその生態に驚きます。

私はそんなタツノオトシゴの虜になって飼育観察に没頭し、完全養殖による事業化に成功しました。かの伊能忠敬が「天下の絶景なり」と称賛した頼娃町の番所鼻自然公園の景色に魅入られ、当地のレストラン跡地にてタツノオトシゴハウスの愛称で観光や養殖を営んでいます。

海のない埼玉県で育った私は、幼少期から川や沼でザリガニ釣りに興じていました。母の故郷香川県へ向かう途中の瀬戸内海の潮の香りに心躍り、いつしか海に関わる仕事が夢となりました。大学卒業後に就職した海洋調査会社では、魚の生態や資源量調査、原子力発電所の温排水調査など各地の海を駆け巡る理想的な職業でした。しかしその一方で、どこかの漁師も「昔の海は良かった」と遠い過去を語るばかりで、それを取り戻すべく効果的な手段もなく、未来の海への希望は薄らいでいました。

ワンタリックであらゆる買ひ物ができる便利な世の中が構築されつつありましたが、水産大国と胸を張れた豊かな日本の海は日々失われていました。どうすれば海は蘇るものかと便利

なると、ニュージールランドでの驚きの取組を知りました。広大な海洋保護区マリナリザープでは、商業目的の漁業も、レジャーの釣りも、海岸の貝殻を持ち帰ることさえもできない厳格なルールのもと、海を再生させる壮大な実験が行われていました。この活動を生で体験したいと三十歳の若さと勢いで会社を辞め、現地の大学の研究所に海洋調査員として飛び込みました。

その海には海藻が生い茂り、大きな魚たちが悠々と泳いでいました。そこで潜っていて出合ったのが美しいタツノオトシゴでした。近付いても逃げない愛らしさに無性に惹き付けられて調べると、漢方薬の原料として東南アジアを中心に乱獲が進み生息数が激減していることが分かり、漁獲をしないニュージールランドでも海藻が少ないう保護区外では見る機会が少ないことに気付きました。日本の海でも減少していることが容易に想像でき、豊かな海の象徴であるように思えました。

日本で取組のないタツノオトシゴ養殖を手掛けるながら、この魅力的な生き物と共に海の素晴らしさを発信したい。人生で初めて心底向き合いたいテーマが見つかり、オーストラリアで養殖技術の基礎を学び、帰国後高知大学大学院で失敗を繰り返しながら国産種を研究しました。養殖を事業化して一生をタツノオトシゴに捧げようと思ひ立ち、温暖な黒潮沿岸の地を求め鹿

略歴

一九九四年 大学卒業後、海洋調査会社に入社
二〇〇二年 会社を退職しオセアニアで海洋保護を学ぶ
二〇〇八年 シーホースウエイズ(株)を起業
二〇一〇年 タツノオトシゴハウスとして一般公開開始
(入場無料)

児島に移住しました。実は鹿児島県の形を逆さにするとタツノオトシゴになることも選んだ理由の一つです。東京で商社マンをしていた兄も鹿児島に魅了され家族を連れて合流しました。Iターンはよくありますが、兄弟セツトは珍しいかも知れません。頼娃町で多くの地域の皆さんのご支援あつてこそ今日だと実感します。

コロナウイルス感染拡大前は近隣の小中学校でタツノオトシゴの話をさせて頂くことがありました。タツノオトシゴの魅力やそれを取り巻く海洋環境問題を知ってもらいたい気持ちにはもちろんですが、生徒に感じとってほしい本質は「タツノオトシゴでご飯を食べている親父もいるのだな」ということです。取り立てて人より秀でるものもなかった私のような人間が大人になつてからでも、心から探究したいテーマを見つけ、物事を下手なりに積み重ねれば充実した人生を送れます。そして夢の合間で周囲を見渡した時に人に支えられていることに気付き、かつての自分と同じような夢の入口にたつ若者の背中を少しでも押してあげること、世の中への恩返しにしたいと思っています。

*ただいま朝日小学生新聞主催(日本水産協賛)のYOUTUBE動画授業に出演中です。「海とさかな自由研究作品コンクール」でご検索ください!



「ぶれない学校経営」Ⅱ「やり抜く・

やり通す学校経営」への取組

田皆小(大) 花 峯 哲 則

一 はじめに

現在校長職三年目で「提言」というほどの確たるものは持ち合わせていない。ともあれ今回「提言」の機会をいただき、校長として日頃感じていることや児童及び教職員に実践させている取組について述べ「提言」とした

二 「四つの実践」への取組

①「雨の日や風の強い日でも自分で歩いて登下校」の実践

②「立ち止まってあいさつ」の実践

③「門札」の実践

④「靴箱の靴のかかとを揃える」ことの実践
これら「四つの実践」は、着任当初から児童に実践させている取組の一つでもある。

特に①「雨の日や風の強い日でも自分で歩いて登下校」は、これまで勤務していた多くの学校で保護者のわが子に対する登下校時の車での送迎が幾度となく見られ残念な光景でもあったため、取り組むものである。この意識改革は保護者ではなく児童への意識改革として取り組んだほうが、着実に成果が上がるものと考ええる。

また②「立ち止まってあいさつ」では、毎朝の校門前での立哨指導の際に、児童へ立ち止まってあいさつすることの大切さを説いた。今では遠くは私の姿が見えると児童は立ち止まることはもとより、大きな声であいさ

つするので私自身の元気の源にもなっている。

ただあいさつの件では、ある地域の方から児童のあいさつがもう一つであるとの指摘をいただいたこともあった。そこで、これを境に新しい取組として児童へは「三でも」の取組を実践させた。「いつでも・どこでも・誰にでも」あいさつをする「三でも」の取組である。大切なことは、児童が地域の中で取組んでいくためにいかに意欲をもたせられるかであると考ええる。

さらに③「門札」では、児童が登校時に校門で立ち止まり一礼することを推奨した。私も毎朝校門に立ち、児童の元気な姿を確認することができた。そのことで児童は一日の始まりに気が引き締まり意欲付けやあいさつや態度の向上を図ることができると考える。

そして④「靴箱の靴のかかとを揃える」では、これまでに多くの学校を参観する機会があったが、その時に必ず目に付くのが児童の靴箱であった。児童の靴がきれいに揃えてあるのを見るとその学校の児童が落ち着いて学習している様子が伺え安心した。

特に学習のいろいろな場面でも揃えることを徹底させることによつて児童の学習もスムーズに進む。揃えるためには、自ら「きちんと揃えよう」という意識をもち自分の心を律していかなければならない。つまり、靴箱

の靴のかかとを揃えることは「自分自身の心を揃える」ことにつながっていくものと考え

三 「モーニングメッセージ」への取組

また昨年度から各担任へ実践をお願いしている「モーニングメッセージ」への取組がある。この取組は、朝教室に入ってきた児童へ担任が前日の退庁時に黒板にメッセージを書き記しておくことを推奨し、その日に児童へ伝えたいことを自由に書いてもらうものである。一日の目標、身近なニュース、格言や偉人の話など内容は様々である。児童は、まずそれを目にし担任が話題にすることで知ること、考えること、気付くことができ視野が広がることにつながる。取組を始めた当初は、なかなか思うようにいかず順調とは言えなかった。担任は、毎日何を書くのかを考えなければならぬからである。しかし、児童や保護者等の反応もあり徐々にではあったが確実に浸透していった。この取組を通じて改めて強く感じたことは、粘り強く継続して取り組ませていくことの大切さである。

四 おわりに

私自身、校長としてのこれまでの二年間の取組を踏まえ「ぶれない学校経営」とは「やり抜く・やり通す学校経営」を日々実践していくことではないかと強く実感している。校長として学校経営を推進していくにあたって大切にすべきことは、ある一つの取組を始めるときに途中で自分の信念を曲げることなく、その取組が確実に定着するまで粘り強く取り組んでいこうとする強い気持ちと学校経営に對する熱い思いではないだろうか。

今後も地域の宝である児童の健やかな成長のために、一歩一歩確かな歩みで「ぶれない学校経営」Ⅱ「やり抜く・やり通す学校経営」を展開し、できることから改革を進めていく。



「校訓を紡ぎ続ける」

面縄中(大) 松下幸男

「往古より創り営む殿堂に」

本校校長室の入口に掲げてある書だが、いつ、誰が書いたのか、詳細な記録が何も学校には残っていない。基と思われる歌は、与謝野晶子の「劫初より作りいとなむ殿堂に われも黄金の釘ひとつ打つ」であろう。この書がある経緯は分からないが、諸先輩方が築き上げてきた教育の下に、その時々々の教職員で力を合わせ、同じように光り輝く黄金の釘を打ちたいと願った思いが伝わってくる。

これまでいくつかの学校を巡ってきたが、他と同様の教育を行いながらも、その学校ならではの特色ある教育が必ずあった。それは、生徒の実態や保護者・地域の願いを生かし、教職員が生徒の成長を思って試行錯誤した黄金の釘の一つだったのだろう。

本校にも、朝のランニング活動やボランティア活動など生徒の活動として受け継がれている伝統がある。今後も時代や生徒の実態に合わせて工夫・改善され、活動によっては継続が難しくなることもあると思うが、活動を支えている理念のような根本的な部分は変わらず受け継がれていくのではないだろうか。本校では、それが「校訓」に表されていると感じている。

本校の校訓は「自律」である。確かな記録はないが、昭和三十五年から四十年までの間に制

定されたと考えられる。シンブルだが、中学生にとつては普遍的とも思えるテーマを含んだ校訓だ。そのためか多くの学校で校訓に採用されており、取り立てて特色のある言葉ではない印象を受ける。しかし、本校の校訓「自律」は、校区出身で奄美群島日本復帰の父とも呼ばれる泉芳朗先生が作詞した校歌の一部「自律の歌に結びあう」から選ばれており、その背景には当時の奄美群島や徳之島の情勢、島から巣立っていく生徒たちへの思いなどがあつたのではないかと想像する。後世の生徒たちに伝えていきたい開校当時の精神性も含んでおり、他校とは異なる意味合いもあると考える。

過去の学校要覧を眺めてみると、学校経営の方針や学校教育目標などは、その時々々の時代の要請や生徒の実態に合わせ、当時の教職員の願いも織り込みながら変わってきた様子が分かる。しかし校訓だけは六十年近く変わっていないことを考えると、本校教育の精神の核と言えるのではないだろうか。生徒や卒業生にとつても、校訓は共通した価値観であり、学校への帰属意識をもつとともに、協力してものごとに取り組むための重要な要素でもある。また、本校は開校から七十三年となり、既に保護者・祖父・祖母の代まで本校の卒業生である方が多い。校訓を学校づくりの中心に据えた教育活動を推進していくことによつて、校訓の精神がより地域

や保護者、生徒たちにも伝わりやすいのではないだろうか。過去から受け継ぎ、未来へつないでいく校訓をもっと積極的に活用し、諸活動にまで深く浸透させることで学校の活性化ができないかと考えた。

そこで、次のようなことを意識して取り組んでいければと思い、できることから始めていく。

・本校の校訓はシンブルなため、学校教育目標との関連性を明確にし、校訓をより具体的に分かりやすくイメージしやすいよう、めざす生徒像とも関連付ける。

・職員間では、校訓を意識した学校づくりのねらいや方向性について理解を深めることで、各行事や各教科・領域の指導目標との関連を意識させ、どの場面で校訓を意識した指導をするのか明確にする。

・校訓を意識した活動等を学校評価の対象として、その取組状況や成果等を検証し、自覚化を図る。また、校訓で求める姿が生徒の姿で現れたと感じられる場面などを記録し、共有すること、次の活動に結び付けていく。

・生徒に対しては、講話や式辞などで、校訓制定の経緯や背景、理念などを分かりやすく説明したり、具体的な例を用いながら校訓につながる教育活動のよさや成果などを説明したりする。

校訓は学校にとつて、唯一無二の大きな釘である。与謝野晶子が後年、講演で冒頭の歌を引き合いに出し、『役に立たない鉛の釘や永久性のない竹の釘などではなくて、千載の後に土の中から掘り出されても光を失わない(黄金の釘)を打ち込んで置いて頂きたい』と話したという。校訓を鉛や竹の釘にすることのないよう、新たな取組なども取り入れながら校訓を紡ぎ続け、常に光り輝かせられるよう、毎日この書を見上げて学校経営にあたっていききたい。



地域に息づく学校をめざして

「立て行け」の精神で

下名小(隅) 岩屋 芳文

一 はじめに

本校は、明治十四年、集落の子弟教育から始まり、創立百四十周年という節目の年を迎えている。自然豊かな環境と広々とした水田地帯に囲まれているが、市街地に近いためか住宅も増え、児童数は微増傾向にある。本年度は、児童数百二十人、八学級の小規模校である。保護者や地域の方々の子どもたちへの思いも強く、創立百周年記念碑には、学校だよりのタイトルでもある、『立て行け』の四文字が深く刻まれている。

二 学校経営の方針

学校教育目標を「豊かな感性とたくましく生きる力を持ち、自ら学ぶ下名の子どもを育てる」とし、「立て行け」を合言葉に、保護者が行かせたくなる学校、子どもが行きたくなる学校、職員が勤めたくなる学校、地域が応援したくなる学校」を目指した教育活動に取り組んでいる。

また、本市全ての小中学校は青少年赤十字に加盟し、主体性を育むために「気づき・考え・実行する」という態度目標を掲げ、様々な活動を行っている。

三 体験・交流を通じた教育活動

地域の方々の子どもたちが健やかに成長することを願い、さまざまな活動を体験させてあげたいと、次のような教育活動に積極的に協力して下さっている。

(一) 育てた餅米を紅白餅にしてプレゼント

地域の方々の協力で特産物である餅米作りを五年生が行っている。田植え、稲刈り、脱穀と米作りを体験している。田畑に囲まれた環境に育っているが、初体験の児童が多い。収穫した餅米で餅つきをし、六年生に卒業祝いとして一人一人に紅白餅をプレゼントしている。全ての活動に地域の方々が協力をしてくださる。稲作体験を通して、自分と米との関わりを考え、自分たちの住んでいる地域のすばらしさを学ぶことができる。

(二) 校区の歴史探訪

生まれ育った故郷を知り、先人たちの歩みに思いを馳せ、生きる知恵を学び、郷土愛を育むために、フィールドワークを行っている。地域の方々十数人にガイドをしていただき、低・中・高学年の三つのコース

に分かれ、石碑や神社、田の神などを巡る。当日は、児童の安全や見守りも兼ねて多くの保護者も参加して下さる。

(三) 施設等とのふれあい学習

優しさや思いやりの心を育むことをねらいとして、低学年は市内の養護学校、中学年は町内の老人保健施設、高学年は障害者支援施設を訪問し、それぞれ交流活動を行っている。合唱やダンスを披露したり、手作りおもちゃで遊んだり、木工製作を行ったりしながら交流する。施設の職員や入居者の方々にはとても喜んでいただき、子どもたちも満面の笑みである。

四 おわりに

昨今、家庭だけで子育てをすることはとても困難な時代である。だからこそ、学校・家庭・地域がつながりを深めて、子どもたちの健全育成に取り組むことが重要になってくる。学校と地域を結ぶネットワークづくりには子どもを中心とした活動を通して行うことが大切であり、地域の文化や歴史に触れる学習は不可欠である。

今後は、地域の協力を得るだけでなく、活動を通して地域の方々の思いや子どもたちの地域に対する思いを学校及び保護者がしっかりと汲み取ることが相互の学びにつながり、郷土愛、ふるさとを担う人材の育成につながると考える。学校・家庭・地域がさらに絆を深め合いながら、子どもたちの応援団となっていただけよう努めていきたい。



わが校の学校経営

三笠中(北) 西原久宣

私は、令和二年四月一日、阿久根市立三笠中学校へ赴任した。三笠中学校は、阿久根市の北西に位置し、脇海岸や笠山など海や山に囲まれた環境にある。今年度は、全校生徒が一二三名、六学級で、創立七十四年目としてスタートした。

本校の学校教育目標は、「**未来を拓く、心豊か**でたくましい**生徒の育成**」、校訓は、**自主・協調・持続**である。また、めざす生徒像は、**(み)**自ら学び、**意欲と自信**のある生徒、**(か)**感謝の心を持ち、**協力・助け合う**生徒、**(さ)**最後までやり抜く、**粘り強い**生徒である。重点目標は、**一 確かな学力の定着** **二 豊かな心の育成** **三 健やかな体の育成** **四 信頼される学校づくり**の四項目である。今年度の研究テーマは、「**自ら学び、考え、表現できる**生徒の育成」よりよい学習習慣の確立と、**協働し学び合う活動を通して**」として、研究を行ってきた。さらに、令和元年度・二年度は、「**魅力ある学校づくり**」の実現に向けて取組を行っていた。研究のテーマとして、**生徒の自己有用感**を

高めるためにはどうすればよいかを三つのチーム**(豊かな心の育成チーム・不登校対策チーム・学力向上チーム)**に職員が分かれて、**研究・実践**を行っている。学校生活において、**生徒一人一人が主体的に取り組むこと**で自信を持つことができれば、**自己有用感を高める**ことができると考えている。

三笠中校区が、**伝統や歴史のある**地域であることを生徒に知ってもらうために、**郷土教育**にも力を入れて実践している。その**伝統文化**の一つとして、**山田楽**を三十年以上にわたって、**地域の方々にご指導**いただきながら、**体育大会などで披露**している。山田楽とは、**関ヶ原の勇将**で**出水の名地頭**といわれた**山田昌巖**(しょうが)が、**小のぼり楽**を取り入れて、**鉦・大太鼓・小太鼓・妙八**からなる**楽器**を使って、**歌はな**く、**掛け声**をかけて**飛び跳ねながら舞う踊り**である。**出征や凱旋の時に踊った**と言われていた。この他、**三笠中校区出身の著名人**として、**鹿児島中央駅前**の「**若き薩摩の群像**」の**寺島宗則**がその一人である。**寺島宗則**は、**幼少期から長崎**

で**蘭学**や**医学**を学び、**薩摩藩江戸藩邸**においても**蘭学**を教えていた。また、**鳥津斉彬**の**侍医**も務めている。**明治維新**を迎えると、**日本の政治家**として、**第四代外務卿**、**第四代文部卿**など**明治政府**を支えた**主要な人物**の一人である。**生徒**たちは、**校区内にある寺島宗則記念館**を見学し、その**功績**を学習することで、**三笠中校区からも明治政府**を支えた**偉人がいた**ことを知る機会となっている。

学力向上に向けての**活動**としては、**毎週水曜日**は「**学力向上の日**」と位置付けて、**放課後**を利用して**Web問題**等を解かせて**解説**まで行っている。また、**家庭学習**においても**毎日百分間学習**することを目標にして**取り組ませている**。**普段の授業**においては、**生徒が自ら学んで考える時間**を十分に確保して、**思考力**、**判断力**、**表現力**を高める**授業**を行うように**職員へも指導**を行っている。

その他、**時間の区切り**での**あいさつ**や**黙想**を**きちんとさせたり**、**活動**の中で**静と動**の**けじめ**をしっかりとつけさせたりして、**日頃からメリハリのある指導**を行うように**指示**をしている。**生徒が、将来、「三笠中学校で学んでよかった」と本校で学んだことに自信と誇り**を持っている。「**未来の君は 今の君のがんばりに きっと感謝する**」を合い言葉にして、**これからも三笠中学校の学校経営**を行っていききたい。



未来で輝くための

「心を育てる」教育の推進

国分南小(始) 鶴丸博文

一 はじめに

本校は、昭和五十年に東小・敷根小・下井小・上之段小の四校が統合して誕生した学校で、今年で創立四十六年目を迎える。

教育目標は、「感性豊かで、活力(生きる力)みなぎる子どもを育てる」である。この教育目標を達成するために、「安心・安全と健康」「確かな学力」「豊かな心」の三つの具体的行動プランを立てて、日々の教育活動に取り組んでいる。ここでは、その中の「豊かな心」を育てるための取組を紹介したい。

二 取組の実際

(一) 心を豊かにする読書活動

読書好きな子どもを育てる取組として、週二回の朝の読書の時間のほかに、担任以外の教職員が本の読み聞かせを行う「ふれあい読書」や異学年の児童がペアを組んで読み聞かせを行う「交流読書」などを行っている。また、年二回の読書月間には、ビデオバトルや図書委員会の子どもたちによる朗読劇、ボランティアグループによるお話会や教職員が推薦する本の紹介など、毎年、趣向を凝らした取組を行っている。

(二) 志を立てる取組

本校には「自分大好き ふくらむ夢」という合い言葉がある。これは子どもたちがより高く、より大きな夢や目標を目指して、今できることを精一杯頑張るようにするために設定されたものである。子どもたちは、将来の夢と今頑張ることをカードに書いて、廊下や階段の踊り場等に掲示している。今年の四月からは「キャリアパスポート」の活用も始まったことから、この取組を家庭とも連携を図りながら、計画的・継続的に推進していきたいと考えている。

(三) 豊かな情操を育てる取組

子どもたちの芸術文化に対する興味・関心を高めるとともに、豊かな情操を育てることをねらいに毎年、芸術鑑賞会を開催している。昨年度は、弦楽四重奏、一昨年度は、ミュージカルを鑑賞した。また、琴の師範の先生を招聘し、高学年の子どもたちに、琴の実技指導を行っていた。凡事徹底(当たり前の事を徹底して行う)本校では、「あいさつ」「履き物」「掃除」の三つを凡事徹底事項に決めている。あい

三 おわりに

子どもたちには、これからの社会がどのように変化しても、自分を見失うことなく、それぞれが思い描く幸せを実現してほしいと願っている。そのためにも、すべての子どもたちが未来で輝くことができるように、今後も「心を育てる」教育に全力で取り組んでいきたい。

さつをすれば、お互いの心が通い合う。履き物をそろえれば、みんなの心がそろろう。掃除をすれば、自分の心が磨かれる。これらのねらいを踏まえ、次の取組を行っている。あいさつについては、全校朝会でありさつの大切さについて話をしたり、児童会が中心になってあいさつ運動を行ったりしている。履き物については、トイレのスリッパなど、みんなですぐ履き物をきちんとそろえることができるように、美化委員会の子どもたちが「きれいなスリッパ大作戦」と銘打った実践力を高める活動を行っている。掃除については、無言で掃除を行うことや掃除終了後に反省の時間を設け、精一杯掃除ができたかどうかを子どもたちがお互いに確認し合うようにしている。以前、本校で開催されたトイレ掃除に学ぶ「洗心教育」研修会では、一心不乱に便器を磨く子どもたちの姿が見られた。





生徒会活動を基盤とした生徒が輝く場

鹿児島大学教育学部附属中(市) 楠 原 豊

一 はじめに

本校は、今年度七十周年を迎える、生徒数五百三十八人、十五学級の中学校である。

前身は、昭和二十二年に開校した鹿児島師範学校附属中学校、鹿児島青年師範学校附属中学校であり、昭和二十六年に統合し、教育学部附属中学校として伊敷町に開校、昭和三十八年に現在地に移転した。

現在、校舎前に立つ七本の銀杏は師範学校跡地から移植したもので、当時の面影を残している。この銀杏には校訓である「真理」、「理想」、「剛健」、「友愛」、「誠実」、「自律」、「雄飛」が名付けられ、今も教職員、生徒の目指す姿を示している。

二 生徒が輝く場

本校の最大の特徴は、生徒会を中心とした生徒の自主的・主体的な活動であり、年間を通して「生徒たちが輝く場づくり」を意図的、計画的に設定している。

まず、本校は「歌に始まり歌に終わる附属中」を伝統とし、様々な教育活動の場面で全校合唱を取り入れている。

例えば、入学式では、在校生が新入生を「トンホイザー行進曲」(ワグナー作曲)で迎える。そのために、生徒会が中心となり、各学級でパートリーダーを中心に、昼休み、放課後に練習を積み重ねる。当日、体育館に響き渡る二、三年生の歌声は圧巻であり、入学生や保護者に多くの感動を与えている(残念ながら今年度は、感染症対策のため放送で歌声を流すのみであった)。

また、九月の運動会は、夏休み前から生徒会が中心となって、スローガンの設定、役割分担、練習の企画、当日の運営を行う。教職員は事前に指導助言を行うが、運動会当日は、教職員が一人もグラウンドに立たない生徒主体の運営による運動会を目指している。

昨年からは始めた生徒朝会G.T(グローバルタイム)は、グローバル社会で活躍する生徒を育成することを目的としており、生徒の英語による進行、グローバル社会を意識した各教科の紹介(社会科・世界の法律、数学・円周率の世界)等を行う。企画段階から生徒自身に関わる課題をもとに、案を作成し、当日

もすべて生徒の手による生徒朝会となっている。

さらに、平成二十五年度から国際理解教育の一環として台湾との交流を進めており、毎年十五名程度の教育実習生を国立台北教育大より受け入れている。生徒会企画による歓迎会や家庭との連携によるホームステイ等を通して、多様な文化に体験的に触れることで異文化理解を深めている。

このような活動を支える生徒会は、「理想を共有しおもしろいを紡ぎ合う生徒会」を目標とし、きょうだい学級(縦制学級)の取組やボランティアなどの地域貢献活動を行っている。

三 おわりに

本校で常日頃大切にしていることは授業である。現在、カリキュラムマネジメントの研究を継続し、学校教育目標を意識した授業の在り方をテーマとした実践を積み重ねており、その結果は生徒の姿で示すことを全職員が目標としている。

下校後の教室を見ると、どの学級も机、椅子が整然と並び「凜」とした雰囲気を感じる。日頃の生徒の心を反映している「残り姿の美しさ」がここにある。

素直で何事にも真剣に取り組む生徒一人一人の自己実現のために、教師が裏方に徹し、生徒が自分のよさを発揮し、輝けるよう職員一丸となって支えていきたい。



指導技能（一般的な用語ではない）

柁城小（始）鶴

潔

二十年ほど前の夏のことである。

社会科の研究大会の講師として有田和正先生を空港から会場まで送迎するという幸運な役目をいただいた。往復三時間、先生を独り占めできる喜びを感じる一方、何を話せばいいのかわからないプレッシャーを感じながら空港に車を走らせた。車は、この役目のために今朝スタンドで洗車したばかりである。しかし、クーラーが効かなくなっていた。まずい、猛暑の日である。

そんな心配がなかったことのように、窓をフルオープンにしての車内の会話は弾んだ。ここぞとばかりに日頃の授業の課題について矢継ぎ早に質問をしていった。先生は笑顔で、その一つ一つに丁寧に答えてくれた。社会科の授業名人と言われる人が本当に楽しそうに私の稚拙な

質問に真摯に回答してくれた。なんとすばらしい人であろうか。車の中で私は有田先生の授業を受ける子どもになっていた。そして、こんな教師になりたいと憧れた。

車中授業の中で、最も印象に残る言葉が次の言葉である。正確には覚えてないが、おおよそこのような内容と記憶している。

「今話したことは、指導技術であつて誰にでもまねできるもの。しかし、本当の君の授業を作るためには、指導技術を君だけにしかない、他の人が真似できない『指導技能』に高めなければいけないよ。つまり、君というフィルターを通して技術を技能まで高めることだよ。」

名人の奥深い言葉である。どうすれば技術を技能に変えられるのかは、毎日の授業の中で技術を磨けということだと捉えた。とにかく楽しんで授業の向上はないということだ。そして、自分だけの授業とは、自分と受け持つ子どもにしかできないことも自覚した。

若いときに、憧れと共にこの言葉をくださった有田和正先生に心から感謝している。

そして、「主体的で対話的な深い学び」を求める今こそ「追究の鬼」を育てるべく教師の指導技術を指導技能まで磨くときであると考える。

「自ら光を放つ小さき灯火たれ」

菱田小（隅）山 鹿 真人

十数年前のことになる。当時私は、県総合教育センターに勤務していた。教育センターといえば「教学一如」が有名だが、私にはもう一つ忘れられない言葉がある。「哲学の道」という散歩道で出会った、朽ちかけた看板。そこには次の一文が刻まれていた。

日の光を藉りて照る大いなる月たらんよりは、自ら光を放つ小さき灯火たれ

森 鷗外

月は誰もが仰ぎ見る大きな存在だが、その光は太陽からの借りものである。それに対し小さな蠟燭の灯火は、せいぜい家族で囲む食卓の上くらいしか照らせない。でも確かに己の力で輝いている。そんな灯火のように、主体的に事に臨め。そういう意味なのだろう。

いつしか私は、自分自身に語りかけていた。人に言われてするのではない。することが決められているからするのではない。自分がやりたからやるのだ。自分がやるべきだと考えるからやるのだ。これまでのお前は、先輩が積み重ねてきた努力や業績に照らされて何となく自分も仕事ができている気分になっていただけで、自分自身の力量不足に目を背けていたのではないのか。それでいいのか。かすかな光でもいいじゃない

か。自分の意志で、自分の力で輝いてみろよ。
今振り返ると、これが、仕事への情熱を自ら燃やした瞬間だった。

ちなみにこの言葉は、鷗外が抄訳した箴言葉『知恵袋』（五、人の長）に記されている。そこには、次の文が続いている。

是れ鶏口牛後の説の骨髓なり。
今小学校の校長をさせていただいているのも、十数年前この言葉に出会った時からの巡り合わせなのかもしれない。

明日も、心に火を灯し、学校へ出かけるでしょう。

「恩返し」よりも

「恩送り」の気持ちで

国上小(熊) 鹿屋 純 一

現在の自分があるのは、これまでに会ってきた多くの人のお陰であることは間違いない。特に、教職に就いてからは、多くの先輩方から恩恵を受けてきた。だが、今となっては、直接『恩返し』をすることは難しい。

六年前、在外教育施設で勤務する機会を与えていただき、シンガポール日本人学校に三年間派遣された。一年目終了時の帰国者送別会で、当時教頭だった私は、司会を任された。

任期を終え帰国する教師やその家族を前にす

ると、右も左も分らない異国での生活や学校での業務、日本人会の行事等について、そこにいる方々から丁寧に教えていただいたことが思い出された。目の前の人々のお陰で、私と妻も健康で充実した毎日を過ごすことができていた。これまで共に過ごしてきたこの仲間は、送別会が終わると日本各地や他国の任地に赴く。ほとんどの人とは二度と会うことがないであろうという寂しさを感じながら会場の人を見ていた。会の中での在任者代表のA校長の言葉に、次のような一節があった。

「皆さんからこれまでに受けた恩を皆さんに返すことは、たぶんできないでしょう。しかし、私たちは、次に赴任して来られる方々や子どもたちに『恩送り』という形で、これまで受けた恩をつないでいきたいと思います。」と。

『恩返し』という言葉は、馴染み深く、これまでも違和感なく使ってきた。しかし、一般的に自分と相手との関係に限定されるものであることにそのとき気付いた。一方、『恩送り』という言葉には、継続性や発展性、さらには社会全体が高まっていくような印象を受けた。

それ以来、私は、『恩送り』という言葉を頭の片隅に置き、良かったと感じたことを自分のできる範囲での『恩送り』を心がけてきた。

ただ、自分自身が人間的にもまだまだ未熟なため、受けた恩をしつかりと渡し切っていないことも多い。だが、今後も自分なりの『恩送り』を続けていきたい。

今飛び立たむ

国分中央高 森川 敏 美

ツマベニチョウ 故郷の風を 背に受けて

思いを抱き 今飛び立たむ

令和二年三月二日、高校卒業式。来賓、保護者、在校生のいない体育館は、穏やかに語る卒業生代表の言葉に包まれていた。

私が離島の高校に校長として赴任し、二回目の卒業式。私にとって一生忘れることのできない卒業式となった。この学年の生徒は、すべてにおいて前向きで、学校行事、部活動、ボランティア活動どれに対しても全力で取り組み、生き生きとして輝いていた。いよいよ旅立ちの卒業式。そんな折、突然の新型コロナ禍。ほとんどの卒業生は島を離れ、進学・就職をする。離島ならではの旅立ちだからこそ保護者、地域の人々の卒業式への思い入れは強い。

小学生の頃、昆虫少年の私は、夏休み、小学校教員であった父に連れられ、奄美大島大和村の群倉(高倉の群落)周辺のハイビスカスが咲き誇る所で、ツマベニチョウの採集をしたものである。夏休みの自由研究で昆虫標本を作るためである。ツマベニチョウは、九州南部以南に生息し、シロチョウ科の中でも最大級の大型の蝶である。飛翔力が抜群で一筋縄では採集できない。一度取り逃がしたら、高く舞い上がり、

小学生の私は、採集をあきらめるしかなかった。父は「ほら見てごらん、吸蜜するために必ずまた戻ってくるよ。」しばらくすると、高く高く舞い上がったツマベニチョウは、すうっと目の前の深紅のハイビスカスの花に吸い込まれるように舞い戻ってきた。小学生の私の目に、ツマベニチョウの白い大きな翅と先端の鮮やかな紅色が鮮明に残った。素直に綺麗でかっこいいと思った。と同時にツマベニチョウの力強さ、生命力を感じた。

ツマベニチョウ 今飛び立たむ

卒業生答辞の言葉が会場に響き渡った。

どうか、卒業生が力強く高く高く舞い上がり、いつかは彼らを大切に育ててくれた島に貢献できる人となって舞い戻ってきてほしいと、とめどなく頬を伝う涙とともに願うばかりであった。



ある日の校長講話



心を+ (プラス)

草牟田小(市) 有 村 真由美

草牟田小学校の目標の一つに「心のこもったあいさつができる」というのがあります。「おはようございます。」「行ってきます。」「いただきます。」「ごちそうさまでした。」「こんにちは。」「さようなら。」「ただいま。」「おやすみなさい。」など、皆さんは一日の中でたくさんのおいさつの言葉を使っていますね。では、「心をこめる」とはどういうことでしょうか。校長先生は朝みんなと会った時、「今日も来てくれてありがとう。」「暑い中、坂道をがんばって上って来たね。」「あと少しだよ、がんばって。」と言葉にはしませんが、心の中で思っている気持ちを付け足して「おはようございます。」と言っています。皆さんの安全を守るために、雨の日も灰が降る日も、朝早くから危険な場所に立ってくださって

いるたくさんの方々もみなさんに「おはよう。」「行ってらっしゃい。」と声を掛けておられます。草牟田小の子どもたちもみんなあいさつをしています。すごいなと校長先生はいつもうれしく思っています。では、自分のあいさつには心がこもっているかな。少し考えてみましょう。(間) どうですか。

明日から、「おはようございます。」というあいさつに「今日もありがとうございます。」や「行ってきます。」「がんばります。」など、ちょっとだけ心を付け足してみたらどうでしょうか。「今日もありがとうございます。」と思えば、お辞儀をしたり、もしかしたらにっこり笑顔で言ったりするかもしれません。心の中は見えませんが「おはようございます。」という言い方できくと、皆さんが心の中で思っていることが伝わって相手はもっとすてきな気持ちになりますよ。おうちの人や地域の方々、先生や友達、すべての人が笑顔になれるよう、皆さんの「心」を付け足してあいさつしてみましょう。

さあ、今日から給食が始まります。「いただきます。」のあいさつに皆さんはどんな「心」を付け足しますか。



あかるくあいさつ

荒川小(目) 中別府 久人

荒川小学校の校訓に「あかるく」があります。「あかるく」を実践するための一つに、「あかるくあいさつ」するということがあります。さて、あいさつは何のためにするのでしょうか。

一つ目は、

あいさつは人と人と心がつながるためにすることです。

学校のみんなが「あかるくあいさつ」している学校は学年が違っていても仲が良いです。そして、地域の方々へ「あかるくあいさつ」することで、地域の方々とも心がつながり合うことができます、また、人と人と心がつながり合えます。「あかるくあいさつ」ができる関係を広げてくださいましょう。

二つ目は、

あいさつは自分を高めるためにすることです。

みなさんの中には友だちや先生、地域の人にあいさつする時、「もし無視されたらどうしよう。」とか「面倒くさいな。」という気持ちがあるかもしれません。こんな気持ちに負けてあいさつができない人は、勉強や運動に意欲が出ない場合があります。「おはよう」という当たり前のことを面倒に感じ、恥ずかしく

思っているあいさつをしようとしたくない人が、授業中に手を挙げて発言をしたり、努力を必要とする運動をがんばったりというもつと難しいことができるはずはないからです。「あかるくあいさつ」することで、自分を高めることができます。

三つ目は、

「おはようございます」のあいさつは「今日一日がんばるぞ」という気持ちの切り替えスリッチのようなものです。

朝、お母さんから叱られて暗い気持ちだったり、今日は苦手な教科があるな、と心が暗くなったりしているも、「あかるくあいさつ」することで、今日もがんばるぞというスイッチが入ります。

この三つの他にも「あかるくあいさつ」することは自分も友だちも元気づけたり、周りの雰囲気をも明るく変えたりする大きな力ももっています。

さあ、今日からさつそく「あかるくあいさつ」していきましょう。



校訓「明るく、強く、正しく 最後まで」を目指して

内城小(大) 雪丸 堅

「明るく、強く、正しく、最後まで」これは内城小学校の校訓です。「校訓」とは何でしょう。校訓とは、これまで内城小学校で学んできた何千何百という卒業生の皆さんが大事にしてきたもの、そして今、内城小学校で勉強している皆さん全員が目指す、大きな目標(めあて)です。

「明るく」は、自信をもつて学ぶ姿を目指しています。そのためには、ふだんから「笑顔で挨拶」をすることが大事です。笑顔は、みんなを元気にしてくれます。挨拶は、仲良しになるうと勇気を出す「心のキャッチボール」です。笑顔で挨拶を続けると元氣と勇氣が湧いてきて、「自分もできるぞ」と自信が付いてきます。

「強く」は、友達と力を合わせ学ぶ姿を目指しています。そのためには、「よく聞くこと」が大事です。友達のことを大切に思い耳を傾けると、話している友達も「しっかり聞いてくれてる」と安心して心強くなります。そして、一緒に力を合わせてがんばろうというやる氣が湧いてきます。

「正しく」は、自分でよく考えて学ぶ姿を目指しています。そのためには、靴箱のはきものを「手にしている荷物を下ろし、両手で正確に

「そろえる」を毎日続けることが大事です。はきものをそろえるとき、自分の心の眼も働き、落ち着いて見て考え行動できるようになってきます。

「最後まで」は、根気強く学ぶ姿を目指しています。そのためには、正しい姿勢で学習することが大事です。中でも、腰の骨を立てることが大事です。集中力が高まり粘り強くなります。「明るく 強く 正しく 最後まで」の校訓の下、四十一名の児童の皆さんと十四名の先生方が心を一つにして、生き生きと学習に励む内城小学校にしていきたいでしょう。



話のひろば

新任校長としての思い

米ノ津東小(北)

唐仁原 宏 樹

四月に新任校長として米ノ津東小学校に着任した。本校区は教育に対しての関心も高く、PTA活動、地域ぐるみの社会体育、自治会活動、

地域子ども会活動も盛んなところである。平成二十三年度以降、社会教育行政を歩み、久しぶりに学校現場に帰ってきた私にとっては、明るい挨拶と笑顔にあふれ、何事も前向きに取り組み先生方や各種社会教育団体が子どもたちのために積極的に取り組んでいる様子に身の引き締まる思いであった。新型コロナウイルス感染症が広がり、困難な状況であるからこそ、私の得意な? 「大きな声、元気」と「明るい挨拶」を忘れずに学校経営に邁進していきたいと思う。

さて、新年度から新学習指導要領が本格的に実施となり社会に開かれた教育課程の実現のためのカリキュラム・マネジメントの大切さや育成すべき資質・能力の三つの柱に基づいた授業改革が叫ばれている。ただ、このような新しい用語、つまり、「流行」には「不易」という教育の普遍的な価値をベースにしたものが土台に

なければならぬ。今回の学習指導要領の改訂のポイントでも「我が国のこれまでの教育実践の蓄積に基づく授業改善の活性化」とある。五月の学校経営として職員に話したこととして、「教師としてのコミュニケーション能力を磨く」「自己肯定感や存在感を感じられる授業づくりや学級経営」という話をさせていた。どんなに子ども主体の、考えさせる授業をつくらうとしても、子どもと対話的にコミュニケーションができる授業づくりができなければ目標は達成できない。子どもたちが「何のために学んで」「何ができるようになった」ということが実感できる授業ができれば、まさに子どもが自己肯定感や学級での存在感を味わうことができ、生徒指導上や学級経営にもいい影響を及ぼすと考える。

新任校長として、久しぶりに学校に帰ってきた私の力不足は十分自覚している。だからこそ、真っ白な気持ちで学校や先生方、地域を愛し、よく交わり、職員や地域の士気を高め、「不易」をベースにした改革に取り組みたい。



日本復帰記念の日

手花部小(大)

新村博文

十二月二十五日は何の日かと問われると、世間一般ではクリスマスと聞くことになるが、奄美群島の人々にとっては「日本復帰記念の日」という大切な日なのである。

これまでも、郷土教育の中で祖国復帰運動の父と呼ばれる「泉芳朗」の話を教材として取り上げたり、復帰記念の行事が行われていることを聞いたりはしていたが、それほど深く考えることはなかった。昨年度、奄美市に赴任してきて、十二月は奄美群島日本復帰記念月間であることを知り、日本復帰について子どもたちに伝えていく取組を行った。

奄美市教育委員会からいただいた参考資料をもとに、郷土の先人に掲載されている教材を読み返し、一年生から六年生までに分かるように話の内容をかみ砕いてまとめていった。全校朝会で、泉芳朗の「断食悲願の詩」や「日本復帰の歌」「朝はあけたり」の歌を紹介しながら、日本復帰への泉芳朗の願い、そして奄美の人々の願いを自分なりに話をする事だった。奄美在住の先生から「今まで、日本復帰記念の日に関する話を何度か聞いてきたが、とても分かりやすかった」と言われ、先人たちの功績があるこそ今の奄美、今の自分たちの暮らしがあることを少しでも子どもたちにも感じてもらうことができたと思う。

そして十二月二十五日、名瀬小学校体育館で「日本復帰記念の日のつどい」が開催された。

各学校の児童生徒や職員、地域住民や関係者で体育館は二階まで人でいっぱいになり、熱気に満ちていた。献花や断食悲願の詩朗読、復帰当時を知る高齢者の方の話など、奄美の日本復帰に対する熱い思いが詰まった集いであった。

それぞれの場所に郷土の人材・自然・文化があり、一つ一つのことを深く知るためには、そこに住み、生活しなければ分からないことが多い。今回、奄美市の学校に赴任したからこそ、奄美群島の日本復帰への願い、思いの強さを実感することができた。奄美市に住んでいる間に、奄美の人材・自然・文化にたくさん触れながら、その良さをさらに味わっていきたい。



「新しい生活様式」

第一鹿屋中(隅)

草野芳人

新型コロナウイルス蔓延により、昨年度末から学校現場も臨時休業や卒業式・入学式などの学校行事や様々な教育活動を予定を変更したり、中止したり、感染防止への対応に迫られた令和二年度のスタートだった。

店頭からマスクが消え、緊急事態宣言まで出され、不要不急の外出を避け、他地域への移動や交流が制限された。マスクの入手が難しくなると、紙や布でマスクを作り、急場をしのいだ。また、外に出られない、人と会えないことで、家に居る時間、家族と過ごす時間が多くなり、改めて身近な繋がりを確認することだった。身近な繋がりの中で過ごす。必要なのは工夫して作り、大切にリユースする。かつては当たり前だった、「古くて新しい生活様式」が広がり、浸透しつつあるように感じられる。

家で過ごす時間が増え、報道される内容も暗い話と以前に放映された番組ばかり。そのような生活の中で、私自身の「新しい生活様式」を発見することができた。

これまで、「本を二行読むと熟睡できる。」などと家族や友人に自慢にもならない話していた。このような状況下になる少し前に一人の歴史小説家と出会い、その作家のシリーズ本を求め、本屋に通うようになった。テレビ人間の私が、夕食後にテレビもつけず、夢中になって読みふけり、三か月で三二冊を読んだ。私の身近に居る家族は、この私の「新しい生活様式」に

驚きつつ、近くで本を読んでいる。

緊急事態宣言が解除され、徐々に元の生活に戻りつつある。まだまだ、第二波・第三波を警戒し、マスクを着用し、レジ前でもソーシヤル・ディスタンシングを保って並んでいる。このような状況が好転し、元の生活に戻ることを皆望んでいることは確かである。そうなる本格的にこれまでの遅れを取り戻すべく、仕事も忙しくなることだろう。本を読むために割ける時間も少なくなるだろう。しかし、忙しいからこそ、読書の時間を確保し、私自身の「新しい生活様式」を引き続き楽しんでいこうと思う。



読書案内



■川上哲也 著

ザ・殺し文句

明和小(市) 図師 弘 秋

数年前、新聞の書評欄に目が止まった。ザ・殺し文句。何やら物騒で、挑戦的なタイトルではないか。「〇〇屋はなぜ潰れないのか」のようなタイトルも直接的でかなりそそるが、こういう一言タイトルもなかなかよい。早速本屋で購入して読んでみた。夢中になって読み続け、結局その日のうちに読み終えてしまった。朝刊の書評欄で発見してから十二時間後のことであつた。ちなみに、あまりにも感動したので、当時勤務していた職場の職員ビブリオバトル大会でこの本のよさを熱く語ったほどであつた。

この本との出会いについてはこれぐらいにして、やはり気になるのは、「殺し文句」とは何かということである。著者の定義はこうである。

「『殺し文句』とは、相手の気持ちをグツと惹きつけ強い印象を残す言葉です。短いワンフレーズで心の中に入り込み、実際に相手を動かす言葉です。」

あの場面でもっと気の利いたことを言っておけば、うまくいったのに、どうして言えなかつたんだらう。私たちはこれまでの人生で、どれだけ残念な思いをしてきたことか。でも、この本を読めば、たちまち「殺し文句」の使い手に早変わりすることができる。

大正時代の総理大臣・原敬のエピソード。毎朝数十人もの陳情客が来ていたのだが、朝一番の客には、必ずこう言つたそうだ。「君の話は、いの一番に聞かねばならんと思つてね。」一方、最後まで待たせた客にはこう言つたそうだ。「君の話はゆっくり聞かねばならないと思つて、最後までお待ちいただきました。」

これなら悪い気はしない。忙しかつたから待たせたのは明白だし、相手も分かっているのだから、なんだか許せてしまふ。言葉は不思議だ。こんな素敵な言葉の使い方、つまり「殺し文句」の使い手になりたいと心の底から思う。

新潮新書七四〇円＋税



今こそ伝えたい 子どもたちの戦中・戦後

万世小(南) 豊 永 尚 弘

著者の野崎さんは、昭和十二年生まれの本校児童の大先輩である。昭和五十八年に「進行性・筋ジストロフィー」と診断されてから闘病日記「一日一絵」を描き、自力で起き上がれない困難な状況でも四十年近くに渡り、毎日絵を描き続けてこられた。テレビや新聞等で紹介されているのでご存じの方も多いと思う。

本校では、野崎さんの「一日一絵」の画材にしてみたらおとうと、子どもたちが学校農園で育てたラッキョウやサツマイモ、キンカン等を送り、今も交流が続いている。そのご縁でご本人から頂いたのが、戦中・戦後を生きた子どもたちの体験を文章と絵で伝えるこの本である。

本校は、昔も今も校舎と運動場が、市道を挟み向かいあっているのは変わらない。ただ、場所は互いに入れ替わっている。校舎二階にある校長室の窓から見えるのは旧校舎跡(現運動場)全体である。野崎さんの体験した学校での出来事と旧校舎全体を描いた野崎さんの絵を重ね合わせる。それから窓に目をやり「あの辺りでの出来事だ」と想像するとぐっと現実感が増した。中でも戦時中篇の「八、特攻隊員を見送った」は印象深い。特攻基地があった万世。学校では幾度も特攻隊員との別れの式が行われたそう

だ。

「最前列に並んでいた私は、隊員とよく目が合った。口を真一文字に結び、凜々しい姿だった。(略)明日出撃して、敵艦を撃沈してくるのだと思っていた。ところが『その日までの命』だったのだ。(略)特攻隊のことについては、先生も大人も誰も何も教えてくれなかった。」

今も当時のまま残る校門前の石階段。両側に並んだ子どもたちが、日の丸を振り特攻隊員を見送る絵があり、やるせない気持ちになった。

戦中・戦後の激動の時代。この本に出てくる子どもたちは皆、貧困に負けず、仲間と協力したくましく、必死に生きている。子どもの姿の中に、人としての力強さを感じた。また、昭和の時代の生活風景や道具、遊びを描いた緻密な絵に、懐かしさを感じ、見入ってしまった。

日貿出版社 価格一、八〇〇円



キリンビール高知支店の奇跡

南種子中(熊) 中 村 洋 一

はたして、所属する学校の教育目標を語ることができる職員が何人いるのだろうか。

森信三氏が存在を教えられ、教師像を考えさせられた「教師の哲学」。数年前、先輩に大迷惑をかけ落ち込んだ状況から救ってくれた「嫌われる勇氣」と「夜と霧」等。紹介したい本は数書あるが、本書を選んだのは、多くの先輩の金言や各講演、教育長の講話等々、腑に落ち刻まれていた言葉が自ずと想起され配列されて、自身を遡源でき、すべきことを後押しされたからである。本書の続編でその過程と方法論が述べられた「負けグセ社員たちを戦う集団に変えるたった一つの方法」と併せて読んで更に明確になった。窮地にも屈せず達成された奇跡は理念、戦略、実行力の相互関係性の見直しに始まり、その意思決定過程にPDCAでなく米国海兵隊のOODAを導入し、消耗戦より機動戦を重視したことなど様々な角度から新たな手だてが綴られていた。だが結局、目標達成に「裏技」はなく、面白くないと思うほど「当たり前のことを徹底的に当たり前に実行すること」の重要性が繰り返し語られていた。「真の強さは優しさと愛、対角線を張れ、凡事の非凡化、本質の追究、体制の俯瞰視、改善的より改革的発想、本気の同僚性」等、読みながら論された当時の

背景とともに先輩方の熱意が思い出され、懐古の情に浸った。その礎は「与えられた場で生きる意味を見つける」こと。駐車場係を全力でしかも笑顔で行う姿までもが浮かんだ。

はたして、所属する学校の教育目標を諳んじることができ、集団の同僚性を実感している職員が何人いるのだろうか。

場を与えられたことに感謝しながら事象に向かい、艱難にも「それがどうした」と笑顔で対峙し、誠意をもって職を全うして恩返しせねばならないと確認できた一冊だった。

講談社、a新書 八四三円



■松下幸之助 著

指導者の条件

川内高 白石秀逸

本書は松下幸之助氏（以下氏とする）が日本と中国を中心に先人に学びつつ、氏の視点から指導者のあり方について百二箇条にわたって述べられたもので、一箇条が見開き二ページにまとめられている。

今から十年前、新任教頭として赴任した学校で、教諭職とのギャップに苦悩していた頃の本と出会った。まえがきには昭和五十年十一月とある。自分が中学一年の時に書かれたものであるが、時代遅れどころかいつの時代にも通ずる、よりどころとすべきものばかりであった。

読み進めながら「これは」と思ったところに小さな付箋をつけていった。ポケットサイズで装丁もしっかりとしていたが、傷まないように本革製のブックカバーを購入し、持ち運んでいた。特に校長として赴任した徳之島では島外の各種会合へは公的交通機関を利用するため、機内・車内・待合所等々では周囲がスマホを操作している横で、付箋も気にせず取り出してはせつせと読み返していた。

第一条「あるがままにみとめる」から最終百二条「再び謙虚と感謝」まで一貫しているのが氏の指導者像。まず指導者は最もよく他人に意見を聞き、いわゆる衆知を集めそれを生かせ

る人でなくてはならないこと。そして自分に対しては厳しいものを持ち、他人に対しては寛容な心をもつこと。また素直な心こそ指導者にとって、これから指導者たらんとする人々にとって、一番大切な基本の心構えだと論される。

後漢の政治家・楊震の「天知る、地知る、君知る、我知る」は服務規律指導上での、黒田如水の「神の罰より主君の罰、主君の罰より臣下の罰、臣下の罰より民の罰の方が恐ろしい」は学校経営上での根底となっている。

PHP研究所 八八〇円＋税



コロナウイルス感染症の影響で、通常なら土日や夜に行われるPTAや地域行事の多くが中止や延期になり、加えて、世の中は外出自粛ムードである。そのような中で、やはり休日や夜は家で過ごすことが多くなった。

さて、そのような状況の中、「趣味・文芸」という鹿児島県の原稿執筆を依頼され、自分は今ままで、好きなこととして何をしてきたんだらう、どんなことに没頭してきたのだからと改めて振り返って見た。

若い頃は、バレーボール少年団の指導に平日も土日も費やしていた。嫁からは「母子家庭だね。」とよく言われた。また、

車が好きで、車をいろいろ触るのももちろん、ただ洗車して、ワックスをかけて、輝いている自分の車を見るだけでも幸せだった。その車でのドライブは、もちろんである。

パソコンにもはまった。視聴覚センターで同じ内容のパソコン研修を三年連続受けた。休日にはパソコンを一日中触っていた。「こんなことはできないか」と思い立つと、朝までその操作に挑戦したこともあった。新しい発見や操作法を知ること、何時間でも夢中になれたのを感じている。

三十代半ば、自宅を持った頃は、ガーデンニングにも凝った。四十代は、ゴルフを始め、長期休みにはコースに出かけ、平日は、学校が終わってから打ちっぱなしに通った。しまいには、自宅の庭に簡易な打ちっぱなし場を作るまでしてしまった。五十代になり、子どもが独立すると、

趣味・文芸

島津四兄弟の活躍を大河ドラマで見たい

上手小(北) 吉 永久 志

天気の良い休日は夫婦で教時間のドライブをするようになった。家を出てから「前はこっちに行つたから、今日はこっちに行つてみよう」と、特に目的はなく出発した。今はどこを走つても、道の駅やコンビニがある。中を覗いて楽しんだり、美味しそうな弁当や物を買って、その日の陽気やその場の景色を楽しみながら昼を食べて帰ってくるという感じであった。

そんな私だが、唯一細く長く続いていることが時代小説を読むことである。NHKの大河ドラマの原作等は、早い時期に必ず読む。また、時代小説家として好きな、池波正太郎、山本周

五郎、藤沢周平、佐伯泰英、宮部みゆき等の作品は多くを読んできた。最近では、多くの時代小説が映画化されたり、TV放映されたりして話題になるが、やはり原作を読みたくなる。

特に、藤沢周平の作品は、武士社会の不条理さや己への苛烈な運命に、静かに耐えながらも、清廉な心に秘めた正義心を持って立ち向かっていく主人公の姿が、風景や登場人物の所作とともに美しく描かれている。ストーリーの面白さと情景の美しさで爽やかに読み進めることができる。中でも、隠し剣シリーズと呼ばれる「隠し剣孤影抄」「隠し剣秋風抄」の二冊は、個人的に傑作であると思う。「必死剣鳥刺し」「隠し

剣鬼の爪」「女人剣さざ波」「盲目剣返返し」等の短編が収められている。己の苛烈で不条理な運命に翻弄されながらも必死に立ち向かう中で、最後に決死の覚悟で繰り出される主人公等の隠し剣、秘剣がどのようなものであるか、最後まで興味深く、面白く読むことができる。

また、最近、天野純希の「衝天の剣」「回転の剣」「破天の剣」を読んだ。戦国末期に三州統一から九州制覇目前までこぎつけながら、秀吉・家康の力に屈せざるを得ず、江戸時代の幕藩体制の中で薩摩藩の基礎を築いた島津四兄弟(義久・義弘・歳久・家久)の活躍の物語である。中には、いろは歌で

有名な祖父島津忠良との関わり、三州統一や九州制覇での伊東氏、龍造寺氏、大友氏、そして、豊臣氏との壮絶な戦い、朝臣氏との鬼島津といわれた活躍、関ヶ原での敵中突破等の有名な話がいとまなく表現されている。鹿児島県人として、管理職として、勇猛且つ知略に満ちた戦いぶり、判断、引き際には、リーダーとしての憧れを感じる。

最近「国民十万人がガチ投票！戦国武将総選挙」というTV番組があった。ベスト三十に島津氏の人物が入っていないのが残念だった。大河ドラマ等で、鹿児島といえは、時代は幕末、人物は西郷隆盛が定番であるが、是非、この時代の島津四兄弟の活躍を扱ってほしいと思っっているのは私だけだろうか。



「支え合う絆」を体感する地

中之島小・中(郡) 前原 貴士

一 中之島の概要

中之島は十島村で面積・人口ともに最大の島である。トカラ富士と呼ばれる美しい稜線の御岳(おたけ)がそびえる。かつて硫黄を採掘する鉱山であった。美しい緑におおわれ、国の天然記念物のアカヒゲをはじめ、野鳥の群れが数多く見られ、鳥のさえずりや心地よい波の音で目覚める。麓の高原には県の天然記念物のトカラ馬が放牧され、ゆったりとした生活を送り、人懐っこい馬たちは、牧場を訪れる人々に自然と近寄って歓迎しているようだ。島の中央部には九州最大の反射望遠鏡を備える天文台があり、澄みきった空気と影響を与える光源のない絶好の環境下で素晴らしい天体ショーが観測できる。また、本格的な資料館があり、歴史や伝統を詳しく学ぶことができる。海岸沿いには温泉が湧き出し、共同温泉は住民の憩いと社交の場になっている。産業は、農業・漁業・畜産業・土木業が中心で、ラッキョウやびわ、柑橘類を栽培している。また、手作りのめんつゆ等、特産物の開発にも意欲的だ。住民の教育への関心は高く、全戸がPTA準会員である。学校と地

域で合同開催する行事が多いため絆が深い。子ども会や親子読書会の行事も活発である。また、中学卒業後は島を離れて高校へ進学する。島立ちの基盤づくりが重要である。

二 生活の中心にあるもの

十島村の全島に言えることは、週二便運航される「フェリーとしま2」が生活の支えであること。先日、一年生の児童に「ぼくのすきなもの」というテーマで船体のカラーリング・ローマ字まで忠実に描いた絵を見せてもらい、描写ぶりに驚いた。校長室の高学年児童が船長宛てに書いた手紙には「私達の宝物」とある。中之島の生活を営む上で物資を届け、貴重な交通手段であることが認識できる。早朝六時から乗組員は勿論のこと、岸壁で待ち構える住民が通船作業(着・離岸等)を行っている。船が着く度に、学校職員も総出で荷物運搬に協力する。その際、住民と顔を合わせることで何気ない会話が生まれ、連帯感が生まれる。船は物資だけでなく、私達の心に絆を運んでいると感じる。また、六月四日には、一日で一か月分相当の雨量を記録した土砂災害警報が発令され、崖崩れ等で停電や断水の災害が発生した。住民による懸命な復旧作業に加え、島外からも救援物資や復旧人員が続々と運ばれた。どんなに心強かったか。島の生活の中心であるとあらためて感じた。

三 中之島の学校として

本校は、今年度小学校が九十年、中学校が七十三年を迎えた児童七名、生徒八名の極小規模校である。十島村では平成三年度から地域活性化に寄与することを目的として「山海留学生制度」(本校は在籍なし)がスタートしている。小・中併設校の良さを生かし、合

四 島立ちに向けて

同で行事を行うことで、先輩が後輩を支援する姿が見られる。また、PTAや子ども会活動が盛んで、ベテランの保護者がリードしている。一例として、大名筍採りがある。食育の充実のため、給食食材として活用される。さらに、全児童・生徒が課外活動の御岳太鼓や少年団に所属し、住民も指導に関わる。一人一人が大切な存在だ。地域も同様で、補修や機材設置の様々な役割を分担しており、それぞれの人材が必要不可欠だ。不便さゆえに、支え合ふ精神は貴重な財産である。

他島との日常的な交流は容易ではないため七島合同で修学旅行や職場体験学習を実施している。また、テレビ会議を活用した合同授業やトカラ集会等も行い、交流を深めている。中学校を卒業すれば進学のために島立ちをしなければならず、自立の精神の育成と同年齢の多様な考えを参考に自分の意思をもつことが大切である。その意味でも、合同学習やテレビ会議を積極的に活用する必要性がある。

五 おわりに

島の最大の宝である児童・生徒の夢の実現のために地域と連携した教育活動に取り組み、直接的であれ、間接的であれ、将来の十島村の発展に寄与できる人材を育てていきたい。



*** こころの詩 ***

稲妻

くらい よる、
 ひとりで 稲妻をみた
 そして いそいで ペンをとつた
 わたしのうちにも
 いなづまに似た
 ひらめきがあるとおもつたので、
 しかし だめでした
 わたしは たまらなく
 歯をくひしばつて つつぷしてしまつた

八木 重吉

一般財団法人鹿兒島県校長会館だより

一般財団法人鹿兒島県校長会館としての登記が完了しましたのでご報告いたします。

教育長異動

○再任 令和二年七月一日付

南大隅町 山崎 洋 一 氏

季節の言葉 「夏越の祓」

草の戸や畳かへたる夏祓 大祓

旧暦六月晦日は一年の前半の折り返し点。半年の穢れを払い、残り半年の健康を祈願する「夏越の祓」が行われます。古来、宮中では六月末の「夏越の祓」と半年後の十二月末の「年越の祓」が対の行事でしたが、年越の方は早くに廃れてしまい、疫病などが流行する時期の夏越だけが残りしました。今年中止のお祭りも多いようです。

編集

後記



新型コロナウイルスのクラスター発生もありましたが、臨時休業時に比べて、学校現場も少しずつ落ち着きを取り戻してきました。しかし、コロナ以前には絶対に戻ることはありません。ウイズコロナの現在において、「学校の新しい生活様式」に則った毎日の生活が始まっています。各学校では、それぞれ対応等を工夫されていると思いますが、何しろ例のないことなので、四苦八苦されていることと思います。

私の勤務校は、特別支援学校であり感染症防止については、これまでも最大限の注意を払ってきました。でも今回のコロナ騒動は、今までの常識がほぼ否定されるほどの大きな出来事でした。学校では「危機管理」がよく言われますが、これほどの「想定外」はなかったと思います。大雨や地震への対応についても、もう一度根本的に対応を考えないといけないと感じた校長先生方は、私だけではないと思います。

さて、暑くなってきたので、もう一つの心配事として「熱中症」があります。クーラーのある教室で学習できる環境にある学校はまだ良いのですが、クーラーのない環境での学習は厳しいものがあります。学習の遅れから、夏休みを短縮する学校もあると聞いています。管理職として、子どものことを第一に考え、できる対応をしていくのが喫緊の課題ではないでしょうか。こうした課題に、一つ一つ取り組めるように健康に気を付けて頑張ってくださいませう。

最後に業務多端な中、玉稿をお寄せいただきまして皆様方に心から感謝いたします。

土井靖之(皆与志養護学校)